

ものも見うけるがこれは誤りで、この南宋版の時点でも未収載である。通行本中には続添の区別を示さない粗悪なものもあるので注意を要する。なお、欠失部については幕末の摹本も残されていないので今のところ具体的内容について知るすべはない。

ともかく、この南宋版は残欠本といえども『和剂局方』を扱う際には必見の文献であり、広く認識されてしかるべきである。

元胤が本書に「先君子収儲医経経方之書必貴真本者豈類藏古玩家僅得柴窯残器奉為至宝耶今若茲本又非徒宋雕可以珍重也」と跋したのはいかにも至言である。

(北里研究所附属東洋医学総合研究所)

『医心方』の伝写について (Ⅲ)

杉立義一

『医心方』安政本巻第卅の札記の末尾には次の識語がある。延慶本此末有康頼永観二年十一月廿八日撰此書進公家長徳元年四月十九日逝去歳八十四延慶二年酉十一月十三日写之畢四十八字”

森立之の『医心方提要』および多紀元倍の『医心方掌記』によれば、安政の初頭、半井家には二種の『医心方』写本が蔵有されていた。一つは正親町帝より下賜された康頼原撰本であり(ただし愚見では康頼原撰本ではなくて天養二年に宇治本を移点した新抄本と考える)。全巻が卷子本で、この半井本卅巻が幕府医学館にもたらされたのは安政元年十月十三日である。他は延慶二年十一月十三日に写し畢った抄本であり、冊子本で半井別本または延慶本と称され、これが医学館にあらわれたのは安政二年三月十一日であった。

その際の延慶本の新古の状態をみるに、古鈔本は蝴蝶粧で十六冊あり、後代の補写本は大和として十七冊、計卅巻卅三冊であったといわれる。また延慶本にはオコト点は全くなく、旁訓・レ点・朱筆ともに半井本と異なっている。巻第卅の巻末には前記の識語があるが、これにより『医心方』を撰進した時日がわかるとともに、それまで確認できなかった丹波康頼の出生・死亡の年月日がわかった。すなわち康頼は延喜十二年に生れ長徳元年に死亡した。

医学館では半井本の影写に当り、当時存在していた各種の『医心方』伝承本を参考にして、その異同を勘案して安政本の札記として、各巻末に記したが、延慶本卅巻のうち古鈔本のみを校勘に用いた。全巻の札記を通じて延慶本の校勘回数は一〇回を数える。

安政二年三月十一日より廿一日迄の間に延慶本は校正を終って半井家に返還された。しかるに安政二年十月二日夜、江戸大地震の際、小川街（小川町表猿楽町）にあった半井邸が災上し、延慶本も烏有にきした。実に惜んで余りあることであった。この間の事情について『医心方掌記』には次のように記してある。

右、別本医心方、乙卯十月二日夜、震災之為メ、半井家自火にて全ク属烏有、実ニ可惜之至也、蓋大義ヲ知ラス妄ニ祕惜スル罪ヲ天ノ怒レルニモヤ、原巻ハ館ニ留置也、故ニ震災ヲ免レ、永ク千万歳ノ後ニ伝ル事ヲ得ルモ囊祖ノ遺靈有護而使然、不出于寛政、而出于安政年間者、蓋有數而、似天使之保護者焉、安政四丁己年正月三日記、唯僅存警異同者、於今也実為難得之祕冊耳。

現在、延慶本医心方の抄本として確認されている零本は、京都大学医学図書館所蔵富士川文庫内の巻第八のみである。しかもこれは巻第八の巻首の九葉（うち一葉は欠）のみである。いまひとつ、尊経閣文庫に所蔵されている巻第十五、第十六の二巻も愚見では延慶本を筆写したものと考えている。

（京都市）